



移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能

住田, 哲郎

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2011-12-21

(Date of Publication)

2012-11-12

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙3172

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003172>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能

住田 哲郎

本研究は、日本語の移動動詞「来る」が文法化した形式であるテクルの各種用法、およびその文法化現象を軸に日本語における受動態、逆向態という2つのヴォイスの体系性と機能性について他言語との比較を含め主に共時的な観点から考察し、さらに、日本語教育への応用を視野に入れ、認知文法論的観点から日本語の受動態、逆向態があらわす事象構造の認知モデルを構築しようとするものである。

第1章「逆向態とは何か」では、ヴォイスという文法カテゴリーの中でも、特に言語類型論を中心とする研究領域で議論されてきた「逆向態 (Inverse)」という概念について世界の諸言語にみられる言語現象を概観した上で、受動態との比較から逆向態の特徴について論じた Klaiman (1991) の3つの項目、および Thompson (1994) の提示した5つの項目をもとに、日本語の言語現象の中にも逆向態に相当する現象が存在するか否かという問題について検討した。そして、日本語では移動動詞「来る」が文法化したテクル形式、ベネファクティブのテクレル形式を逆向態の機能を有するヴォイスマーカーとして見る事が可能であることを示し、それらについて形態的、統語的、意味・機能的、語用論的観点から日本語の逆向態を特徴づけた。日本語の逆向態は、形態的観点からすると、ベネファクティブの場合はテクレル形式が義務的に、それ以外の場合はテクル形式が任意で動詞に有標のマーカーとして付与される。統語的観点からすると、動詞に有標マーカーが付与されても、もとの文構造に影響を及ぼさない。また意味・機能的観点からすると、ソト (の動作主) からウチ (の被動作主) へと動詞のあらわす行為がなされることをあらわし、動作主の行為により影響を受けた者 (受影者) の話題性を高め、かつ動作主にもある程度の話題性を保持させる。そして語用論的観点からすると、人称・有生性のハイアラーキーの下位から上位へと行為がなされる他動的事象において逆向態は起こりうる。以上の4つの点を指摘した。

第2章「テクルの用法分類」では、現代日本語におけるテクル文に関する先行研究の概要とその問題点を指摘した上で、テクル文は空間的用法とアスペクト用法を持つとし、それぞれの用法の詳細を明らかにした。空間的用法については、前項動詞のテ形と後項動詞クルの間に接続詞「それから」を挿入できるか否か、着点の二格をとることができるか否か、また「誰モ〜ナイ」という構文において否定のスコープがどこまでおよぶかという観点から用例を検討し、「独立動作」「様態・付帯状況を伴う移動」「求心的移動」「逆向態」という4種の用法があることを示した。また、アスペクト用法については、「だんだん」「これまで」といった副詞との共起関係から用例を検討し、「状態・状況変化」「継続」という2種のアスペクト用法に分類できることを示した。中でも、「逆向態」というヴォイスとして機能する用法を、テクルの空間的用法のひとつとして位置づけた

点は、これまでの先行研究に見られなかった新しい試みである。

第3章「テクルにおける逆向態用法の特徴」では、Nariyama (2000)、Shibatani (2003) など数少ない日本語の逆向態に関する先行研究での議論を踏まえ、テクル文の中でも特に求心的移動用法と逆向態用法を取り上げて、この2つのテクルの用法において前項動詞にどのような性質の動詞がくるのかという観点から比較検討し、テクルの逆向態用法にみられる特徴について論じた。また、テクルの逆向態用法には、「嫌悪性」「未完了性」という機能的特徴があることを指摘し、それらと前項動詞の種類との関係性についても明らかにした。そして、これまでの先行研究のようにテクル文を「移動」の枠組みの中でのみ分析するのではなく、ヴォイスとしての機能的性質に着目することで、他のカテゴリーとの関係性も含め、より体系的に日本語文法を説明できるようになったことを主張している。

第4章「移動動詞「来る」の文法化」では、テクルの意味・機能の派生関係に関する先行研究(坂原(1995))の議論を再検討し、移動の本動詞「来る」が、テ形補助動詞のテクルへと意味・機能を変化させていく文法化の過程と、その変化のメカニズムについて論じた。まず、テクル文の各用法を、独立動作をあらわすV+V型、様態・付帯状況を伴う移動をあらわすVm-V型、求心的移動をあらわすV-V型、逆向態をあらわすV-v(I)型、状態・状況変化をあらわすV-v(A1)型、継続をあらわすV-v(A2)型という6つの型に分類した上で、言語データを文法化理論に基づいて分析し、6つの用法の派生関係とその文法化の度合いを明らかにしている。これまで、テクルの文法化に関する様々な論考では、接続動詞「て」と移動動詞「来る」が結びついて「来る」の本動詞としての意味が弱化し、アスペクト機能を有するようになったといったように比較的単純に結論付けられることが多かったテクルの文法化現象について、本研究では文法化による意味・機能変化とその派生関係は、それほど単純な経路をたどるのではなく、かなり複雑な要因によって複数の方向に意味・機能が変化していることを示した。

第5章「日本語ヴォイスの機能分布」では、特にインターアクティブな他動的現象において、日本語の受動態と逆向態がどのように機能的な役割を分担しているのかという問題について検討し、日本語のヴォイスの体系と機能の関連性について考察した。まず、テイクが順向態であり、ベネファクティブの諸形式がそれぞれ順向態、逆向態、受動態であることを示した後、能動態、順向態、逆向態、受動態の4つのヴォイスが「動詞の有標性」「人称・有生性のハイアラーキーに基づく動作・行為の方向性」「文構造の変化の有無」の違いによって、動作主と受影者に対する焦点化の度合いをコントロールし、事態参加者の相対的な話題性の差を調整していることを明らかにした。さらに、ベネファクティブの諸形式はポジティブな意味、テイク、テクル、レル・ラレルは中立の意味

に基軸を置いているのだが、その中でテクル、レル・ラレル、テヤルはネガティブな意味へと意味拡張をしており、このことによってヴォイス形式の機能分布の体系的性が保たれていることを明らかにした。

第6章「日本語ヴォイスの事象構造」では、受動態のレル・ラレル文、逆向態のテクル文があらわす事象構造について、認知文法論的立場から分析し、イメージスキーマを用いて各ヴォイスの認知モデルを構築している。ここでは、認知モデルを用いて日本語のヴォイスを再検討することで、これまでの先行研究では見えてこなかった受動態の用法間における共通性や相違点、およびそのメカニズムについて統合的な説明が与えることができた。また、レル・ラレル文とテクル文は、同じ事態構造を持ちながらも事態参加者に対するプロファイルの仕方など、認知的メカニズムの違いが言語形式に反映され、その機能的な差を生み出していることを示した。さらに、「一用法」といった名称による分類ではなく各ヴォイスの事象構造をスキーマ化した認知モデルそのものを、事象構造内の事態参加者の意味役割とそれらに対するプロファイルの施し方によって定められるフレーム的な「ヴォイスの意味」と位置づけた。これは、これまでの先行研究にはなかった新しい試みである。

本研究では、以上のように日本語の移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能について共時的な観点からダイナミックに言語現象を考察し、テクルの逆向態というヴォイスとしての用法の存在を指摘するだけでなく、それを日本語の分析に取り入れることで、これまで別々の現象と捉えられてきた受身のレル・ラレル文、移動表現のテイク文、テクル文、ベネファクティブのテヤル/テヤゲル文、テクレル文、テモラウ文の関連性を示して、受動態、逆向態を基軸に日本語のヴォイスの体系を機能的観点から再構築した。

論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名	住田 哲郎
論文題目	移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能

1 審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	鈴木 義和
副査	教授	松本 曜
副査	准教授	矢田 勉
副査	准教授	高梨 信乃
副査	名誉教授	西光 義弘

2 論文審査の結果の要旨・・・・・・別紙1のとおり

3 試験の結果の要旨・・・・・・別紙2のとおり

4 学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果、並びに学力の確認の結果、論文提出者は博士（学術）の学位を得る資格があることを認める。

神戸大学大学院人文学研究科

論文審査の結果の要旨

氏名	住田 哲郎
論文題目	移動動詞「来る」の文法化とヴォイス機能

要 旨

本論文は、日本語の移動動詞「来る」が文法化した形式であるテクルの各種用法およびその文法化の内実を検討した上で、日本語のヴォイスの体系性と機能性について他言語との比較を含めて考察し、日本語における逆向態の存在を確認するとともに、日本語教育への応用も視野に入れて認知文法論的観点から日本語のヴォイスが表す事象構造の認知モデルを構築することで、日本語におけるヴォイスという文法カテゴリーの全体像を明らかにしようとするものである。

第1章「逆向態とは何か」では、ヴォイスという文法カテゴリーの中でも特に言語類型論を中心とする研究領域で議論されてきた「逆向態(Inverse)」という概念について、受動態との比較から逆向態の特徴について論じた Klaiman(1991)の3つの項目および Thompson(1994)の提示した5つの項目をもとに、日本語の言語現象にも逆向態に相当するものが存在するか否かという問題を検討し、日本語では移動動詞「来る」が文法化したテクル形式およびベネファクティブのテクレル形式を逆向態の機能を有するヴォイスマーカ―として見る事が可能であることを明らかにしている。さらに、日本語の逆向態の特徴として、形態的には、ベネファクティブの場合はテクレル形式が義務的に、それ以外の場合はテクル形式が任意で動詞に有標のマーカ―として付与されること、統語的には、動詞に有標マーカ―が付与されても、もとの文構造に影響を及ぼさないこと、意味・機能的には、ソト(の動作主)からウチ(の被動作主)へと動詞の表す行為がなされることを表し、動作主の行為により影響を受けた者(受影者)の話題性を高め、かつ動作主にもある程度の話題性を保持させること、語用論的には、人称・有生性のハイアラーキーの下位から上位へと行為がなされる他動的事象において逆向態は起こり得ることの4点を指摘している。

第2章「テクルの用法分類」では、テクル文は空間的用法とアスペクト用法の2つの用法を持つとし、それぞれの用法の詳細を明らかにしている。空間的用法については、前項動詞のテ形と後項動詞クルの間に接続詞「それから」を挿入できるか否か、着点の二格をとることができるか否か、「誰モーナイ」という構文において否定のスコープがどこまでにおよぶかという観点から用例を検討し、「独立動作」「横態・付帯状況を伴う移動」「求心的移動」「逆向態」の4種の用法があること、アスペクト用法については、「だんだん」「これまで」といったアスペクチュアルな意味を持つ副詞との共起関係から用例を検討し、「状態・状況変化」「継続」という2種の用法に分類できることを示している。中でも、「逆向態」というヴォイスとして機能する用法を、テクルの空間的用法のひとつとして位置づけた点は、これまでの先行研究に見られなかった新しい試みである。

第3章「テクル文における逆向態用法の特徴」では、Nariyama(2000)、Shibatani(2003)などの議論を踏まえた上で、前項動詞にどのような性質の動詞がくるのかという観点をを用い、テクル文の逆向態用法と求心的移動用法とを比較しながら検討して、テクル文の逆向態用法が「嫌悪性」「驚嘆性」「未完了性」という特徴を持つことを明らかにするとともに、その詳細について論じている。まず、テクルの前項動詞を「主体移動動詞」「対象移動動詞」「非明示的移動動詞」「行為動詞」の4種に分類し、求心的移動用法では主体移動動詞を、逆向態用法ではそれ以外の3種の動詞を取ることを確認した上で、主体移動動詞および対象移動動詞ではテクル形式の付与が義務的であり、行為動詞ではテクル形式の付与は任意であって、非明示的移動動詞場合にはその中間の性質を持つこ

主査記載
氏名・印

鈴木 義和

と、そして、テクルの付与が義務的である場合には嫌悪の意味が生じにくい、任意である場合には嫌悪の意味が生じやすいことを示し、次に、テクルの逆向態用法が驚嘆や賞賛を表す場合があることを指摘し、その場合には前項動詞に制限がないことを示す。さらに、テクルがタ形を取りテキタとなった場合に前項動詞の表す行為が必ずしも完了せず、未完了となる場合があることを指摘し、これは前項動詞が非明示的移動動詞、対象移動動詞で、接触ないしそれに準ずる意味を表す場合であることを明らかにしている。

第4章「クルの文法化」では、テクルの意味・機能の派生関係に関する坂原(1995)の議論を再検討し、移動の本動詞「来る」がテ形補助動詞のテクルへと意味・機能を変化させていく文法化の過程とその変化のメカニズムについて論じている。テクル文の各用法を、独立動作を表すV+V型、襟態・付帯状況を伴う移動を表すVm-V型、求心的移動を表すV-V型、逆向態を表すV-v(1)型、状態・状況変化を表すV-v(A1)型、継続を表すV-v(A2)型という6つの型に分類した上で、言語データを文法化理論に基づいて分析し、6つの用法の文法化の度合いが、Vm-V型>V-V型>V+V型>V-v(1)型/V-v(A2)型>V-v(1)型の順であること、派生関係としては、Vm-V型、V-V型、V+V型は本動詞「来る」から直接、V-v(A1)型、V-v(1)型はV-V型から、V-v(A2)型はVm-V型から、それぞれ派生したものであるという結論を得ている。これまでのテクルの文法化に関する議論では、接続助詞「て」と移動動詞「来る」が結びついて「来る」の本動詞としての意味が弱体化してアスペクト機能を有するようになったというように比較的単純に結論づけられることが多かったが、本章の考察によって、文法化による意味・機能変化とその派生関係がかなり複雑な要因によって複数の方向に意味・機能が変化している実態が明確に示されることになった。

第5章「日本語ヴォイスの機能分布」では、特にインターアクティブな他動的事象において日本語の受動態と逆向態がどのように機能的な役割を分担しているのかを検討し、日本語のヴォイスの体系と機能的関連性について考察している。テイクが順向態であること、ベネファクティブの諸形式テヤル、テクレル、テモラウがそれぞれ順向態、逆向態、受動態であることを示した後、能動態、順向態、逆向態、受動態の4つのヴォイスと「動詞の有標性」「人称・有生性のハイアラーキーに基づく動作・行為の方向性」「文構造の変化の有無」という3つの条件の関係を検討し、これらの条件の違いによって動作主と受影者に対する焦点化の度合いがコントロールされており、事態参加者の相対的な話題性の差が調整されていることを明らかにしている。さらに、ベネファクティブの諸形式はポジティブな意味に、受動文、テイク、テクルは中立の意味に基軸を置いていること、その中でも受動文、テクル、テヤル/テヤグルはネガティブな意味へと意味拡張をしていることを指摘し、このことによってヴォイス形式の機能分布の体系性が保たれていると主張している。

第6章「日本語ヴォイスの機能分布」では、受動態のレル/ラレル文、逆向態のテクル文が表す事象構造について、認知文法論的立場から分析し、イメージスキーマを用いて右のような認知モデルを構築している。このような手法で日本語のヴォイスを再検討することによって、レル/ラレル文とテクル文が同じ事態構造を持ちながら、事態参加者に対するプロファイルの仕方などの認知的メカニズムの違いが言語形式に反映され、ことでその機能的な差が生み出されていることを示すとともに、従来の研究では見えてこなかった受動態の用法間の共通性や相違点、およびそれらが生じるメカニズムについて統合的な説明を与えた。このように、各ヴォイスの事象構造をスキーマ化した認知モデルそのものを事態参加者の意味役割とそれらに対するプロファイルの仕方によって定められるフレーム的なヴォイスの意味と位置づけたことは、これまでになかった試みである。

本論文は、テクルの用法およびその文法化の検討、ベネファクティブを含む様々なヴォイス形式の分析などをおして、受動態、逆向態を基軸に日本語のヴォイスの体系を機能的観点から再構築しようとする意欲的な研究である。個々の議論についてはさらに深めるべき点も多々あり、文法化現象の実証的な検討など論じ残された問題も少なくないが、住田(2006)でいち早く提示された逆向態に関する議論を展開し、従来その内実はおろか存在自体があいまいであった日本語における逆向態をヴォイス体系の中に正確に位置づけ、その詳細を明らかにしたことは高く評価することができる。

以上のことから、本審査委員会は、論文提出者住田哲郎が博士(学術)の学位を授与するにたる資格を持つとの結論を得た。

